

## 大報恩寺六観音菩薩像研究 — 納入経・造形・祈願に着目して —

もり かなこ

森 香那子 (東北大学)

発表  
要  
旨14  
時  
50  
分  
—  
15  
時  
30  
分松  
ヶ  
崎  
・  
西  
キ  
ャ  
ン  
パ  
ス  
内  
セ  
ン  
タ  
ー  
ホ  
ール

京都大報恩寺が所蔵する六観音像は、聖・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪の六軀の観音像で構成された一具の木彫群像である。准胝の像内銘文から13世紀前半に活躍した慶派仏師、肥後定慶が製作に関わったことが、馬頭と如意輪の納入品から藤原以久夫婦が施主であることが判明している。本一具像の主題である六観音とは、天台智顛の主著『摩訶止観』に起源をもつ、六道から人間を救済する観音菩薩である。本作は六軀完存している六観音を主題としたほぼ唯一の作例で、さらにこの時代の彫刻では他に類を見ない等身かつ素地仕上げの作例である。

先行研究では肥後定慶の手による准胝観音像を中心に、慶派の特徴を備えながらも地髪・面貌・衣紋に見える特殊な表現が注目されてきた。しかし、本一具像の宗教的な機能については十分に検討されてきたとは言い難い。仏像制作の背景には、必ず施主の祈願と造像の基盤となる思想が介在する。本発表の目的は、本一具像に期待された功德と、それを実現させるために用意された宗教的な構造を明示することである。

まず像内納入経典に注目する。本一具像には、各々尊名に対応する経典が納められていてその内容はすべて異なるが、大きな共通点が二つあげられる。一つはすべての経に六道抜苦と来世の救済が祈られている点である。これは主題が六観音であること以上に、本作が六道済度を目的として造られた根拠として強力である。もう一つの共通点は、それを叶えるものとして、観音の陀羅尼の威神力が讃嘆されている点である。同時代の観音信仰の例として、解脱房貞慶の『観音講式』があげられる。この講式内では観音には滅罪と引接の力があり、それを叶えるのは陀羅尼の力であると述べられている。

次に、納入経の陀羅尼と密接に関連するのは本作の造形的特徴である。素地仕上げであることと、等身像として加工するには扱いにくいカヤ材をあえて用いていることから、本一具像は「十一面神呪心経」に説かれる檀像の造像作法を採用していることが推測されるが、それは同経典内で説かれるように陀羅尼の威力を強化するためと思われる。また、像が備える生動感も陀羅尼の効果を実感させる特色と見なされる。ところで、いずれの納入経にも陀羅尼は読誦することで効果を発する旨が記され、経典を納入する必要性は記されていないが、納入経はまた法舍利としての意味がある。経典の納入は陀羅尼読誦の代替であるとともに、本一具像を生身に近づける措置の一つと発表者は考える。

平安中期の法成寺薬師堂以降、六観音造像は盛行するが、そこから何を継承し新たに創造したのかをもあわせて検討し、納入経典と造形の特徴、同時代の思想から再構成した功德実現の構造を踏まえ、本一具像が、13世紀初頭鎌倉仏教の入念かつ合理的な信仰を象徴する群像であることを新たに示したい。